

小学校第3学年 C 走・跳の運動 ア かけっこ・リレー

単元目標

知識及び技能	リレーの行い方を知るとともに、走りながらタイミングよくバトンを受渡したり、コーナーの内側に体を軽く傾けて走ったりできるようになる。
思考力、判断力、表現力等	バトンの受渡し方やコーナーの走り方を友達と見合ったり、誰もが楽しくリレーに参加できるように競走の仕方（コースの選択）を工夫したりしながら、課題の解決のために考えたことを友達に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	運動に積極的に取り組みながらルールを守り、友達と助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、友達と互いの考えを認め合ったり、場の安全に気を配ったりすることができるようにする。

	①	②	③	④	⑤	評価規準
ねらい	リレーの行い方について理解するとともに、単元の見通しをもつことができる。	バトンの受渡し方やコーナーの走り方を観点にして、ペアチームで動きを見合いながら課題解決に取り組むことができる。	バトンの受渡し方やコーナーの走り方を観点にして、ペアチームで動きを見合いながら課題解決に取り組むことができる。	全力で走り切ることができ観点を競走の仕方（コースの選択）を考えながら、みんなですれ違うコースリレーを楽しむことができる。	大会を開催し、単元のまとめをすることができる。	【知識・技能】 ①リレーの行い方について、言ったり書いたりしながらタイミングよくバトンの受渡しができる。 ②コーナーの内側に体を軽く傾けて走ることができる。
導入	共：心と体をほぐすために、うつつ伏せになってスタートする等、いろいろなスタートの仕方、ウォーミングアップを行う。	バトンの受渡し方を確認し、本時学習のめあてをつかむ。	うつつ伏せやおむけになってスタートする等いろいろなスタートの仕方、ウォーミングアップを行う。	競走の仕方（コース選択）を考慮することを確認し、本時学習のめあてをつかむ。	これまでの学習を生かして大会を行うことを確認し、本時学習のめあてをつかむ。	【思考・判断・表現】 ①バトンの受渡し方の動きについて考えたことを友達に伝えている。 ②競走の仕方（コースの選択）について、考えたことを友達に伝えている。
展開	セレクトコースリレーのルールを提示し、試しのリレーを行う。 ・1チーム6名（男女混合）とし、リレーを行う。	バトンの受渡し方やコーナーの走り方を観点に、ペアチームで互いの動きを見合いながら課題追究を行う。 共：（2）動きを追求する観点を明確にした学び合いについて ・ペアチームで課題追究を行う方法を提示する。 共：（3）自分の考えを可視化できる発言ボードの活用 ・練習後に振り返りの時間を設定する。	バトンの受渡し方やコーナーの走り方を観点に、ペアチームで互いの動きを見合いながら課題追究を行う。 共：児童が友達と関わり合いながら繰り返して課題追究をすることができるよう、ペアチームで課題追究を行う方法を提示する。 共：体力差の違いを考慮しながら、一人一人が全力で走り切ることができ観点について話し合い、互いの考えを認め合うことができるように、練習後に振り返りの時間を設定する。	全力で走り切ることができ観点を競走の仕方（コースの選択）を考えながら、みんなですれ違うコースリレーを楽しむことができる。	前時で決定したコースで、バトンの受渡しやカーブの走り方に気を付けながら大会を行う。 共：リレー後、みんなが全力で走り切ることができ観点について話し合い、次のリレーで修正できるよりに話し合う時間を設定する。	【主体的に学習に取り組む態度】 ①リレーやその練習に積極的に取り組もうとしている。 ②ルールを守り、友達と助け合おうとしている。 ③リレーの勝敗を受け入れようとしている。 ④競走の仕方（コース選択）について話し合う際に友達の考えを認めようとしている。 ⑤活動を行う際に、場の危険物を取り除く等、安全に気を配っている。
終末	試しのリレーの感想を伝え合い、単元のめあてをつかんだり、見直しをもつたりする。	試しのセレクトコースリレーを行い、本時学習の振り返りを行う。 共：（1）体力差にかかわらず誰もが運動を楽しむことができる時間を設定する。 共：チーム内で走るコースについて話し合う時間を設定する。 共：チーム内や全体で友達の頑張りを称賛し合う時間を設定する。	試しのセレクトコースリレーを行い、本時学習の振り返りを行う。 共：（1）体力差にかかわらず誰もが運動を楽しむことができる時間を設定する。 共：チーム内で走るコースについて話し合う時間を設定する。 共：チーム内や全体で友達の頑張りを称賛し合う時間を設定する。	単元の振り返りを行う。 共：単元を通して全員が楽しむことができるように競走の仕方を考えたよさを交流し、新賛し合う時間を設定する。	単元の振り返りを行う。 共：単元を通して全員が楽しむことができるように競走の仕方を考えたよさを交流し、新賛し合う時間を設定する。	

知識・技能	①	②	③	総括評価	
思・判・表	①	①	②	②	
主	②	⑤	①	③	④

体力差にかかわらず誰もが運動を楽しむことができる教材づくりの工夫を通して  
小学校第3学年 C 走・跳の運動 A かけっこ・リレー

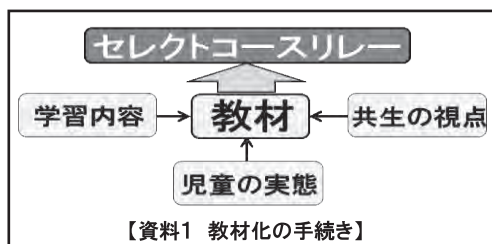
1 単元の目標

- リレーの行い方を知るとともに、走りながらタイミングよくバトンを受渡したり、コーナーの内側に体を軽く傾けて走ったりできるようにする。 【知識及び技能】
- バトンの受渡し方やコーナーの走り方を友達と見合ったり、誰もが楽しくリレーに参加できるように自分の能力に合ったコースを見つけたりしながら、課題の解決のために考えたことを友達に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- 運動に積極的に取り組みながらルールを守り、友達と助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、友達と互いの考えを認め合ったり、場の安全に気を配ったりすることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

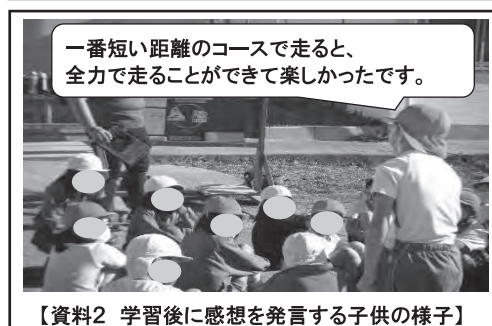
2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 体力差にかかわらず誰もが運動を楽しむことができる教材づくりについて

本学級において単元前に「体育の学習に関する児童アンケート(21項目質問紙アンケート)」を行ったところ、「体育の学習で体力に差がある仲間と運動すると楽しいです」という質問に対して、25名中7名が否定的な回答だった。そこで、【資料1】のように、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編に示されている学習内容から周回リレーの教材



を分析するとともに、体力差にかかわらず、誰とでも運動を楽しむことができるという共生の視点を考慮して、「セレクトコースリレー」の教材づくりを行った。「セレクトコースリレー」は、チーム内で走る距離(3コース)を選択(セレクト)して競走するリレーである。全員が一定の距離を走って行う周回リレーではなく、体力の差に応じて自己の能力に適した距離をチーム内で選択できるようにした。運動に対して苦手意識をもっていた子供は3種類全てのコースを走り終わった後に「一番短い距離だったら、最後まで全力で走れた!」と、喜ぶ姿が見られた。また、学習後の感想でも「一番短い距離のコースで走ると、全力で走ることができて楽しかったです」と、発言する姿も見られた【資料2】。



(2) 動きを追求する観点を明確にした学び合いについて

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編に例示されている周回リレーには、「走りながら、タイミングよくバトンの受渡しをすること」「コーナーの内側に体を軽く傾けて走ること」の2点が示されている。そこで、第1時の試しのリレー後に子供から聞かれた「バトンパスがうまくいけばもっとはやくなりそう」や「カーブを走るのが難しかった」という感想をもとに、第2時では「バトンの受渡し」、第3時では「コーナーの走り方」を追求する観点(課題)として活動に取り組みさせた。【資料3】のように、互いの動きを見ながら、観点に沿って、考えたことを伝え合い、再



度練習して確かめながら課題解決する姿が見られた。このような学び合いを通して、少しずつバトンの受渡しやコーナーの走り方について動きを高めることができていた。

### (3) 自分の考えを可視化できる発言ボードの活用

体育の学習においても、自分の考えを友達に上手く伝えることが難しい子供がいる。特に、運動に対して苦手意識をもっている子供は、そのことが顕著な子供が多いと考える。そこで、第3時では「全力で走り切ることができるコース」について、全ての子供が、自分の感じていることを友達に伝えることができるようにするために、感じたことを記号化して表現することができる発言ボードを活用した。また、発言ボードを活用する際は、一人一人の名前を記載したネームプレートを用意し、誰の考えかが分かるようにした。【資料4】のように「〇〇さんは、一番短い距離がいいんだね」等、チーム内で互いに感じたことを認めようとする姿が見られた。



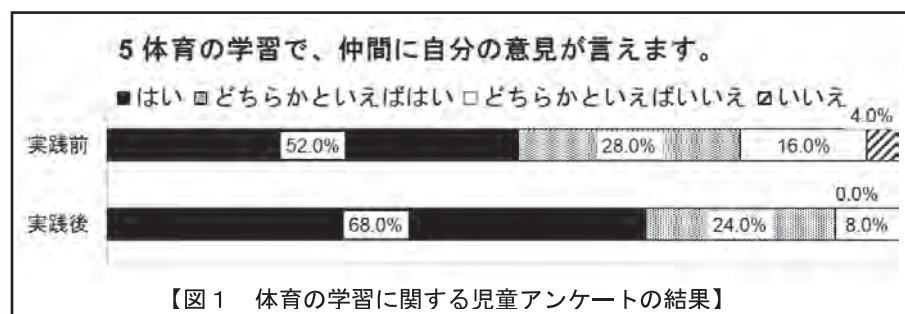
【資料4 互いに感じたことを認めようとする子供たちの様子】

## 3 成果と課題

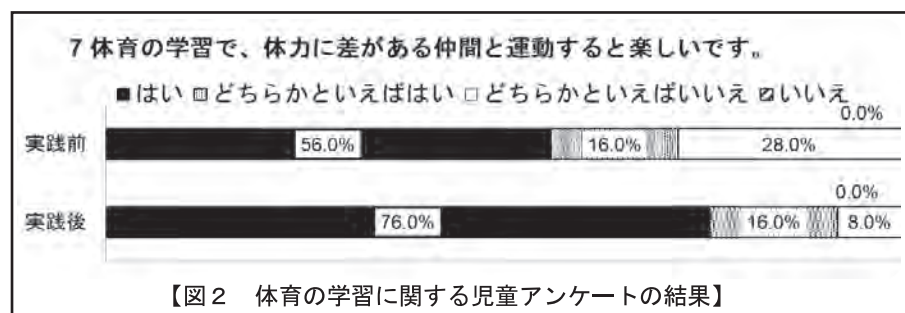
### (1) 成果

単元前後に行った「体育の学習に関する児童アンケート (21 項目質問紙アンケート)」の「体育の学習で、仲間に自分の意見が言えます」「体育の学習で、体力に差がある仲間と運動すると楽しいです」の結果から成果を述べる。

- 交流する際の観点(課題)を示したり、自分の考えを可視化できる発言ボードを活用したことは、チームで観点到に沿って互いの動きを見合う学び合いを活発にしたり、自分の意見を友達に伝えることができたりすることにつながった【図1】。そのことが、走りながらバトンの受渡しをすることができるようになったり、コーナーで体を傾けて走ったりする動きの習得や高まりにもつながったと考える。



- 自己の能力に適した距離をチーム内で選択できるようなセレクトコースリレーの教材化を行ったことは、全ての子供が運動の楽しさや喜びに触れることができ、体力に差がある友達と運動すると楽しいと肯定的に答えた子供の割合が増えることにつながったと考える【図2】。

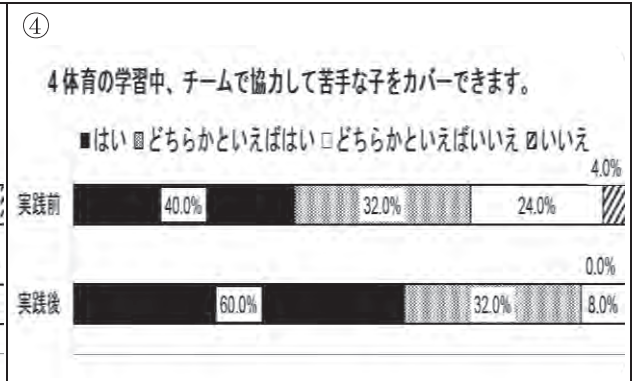
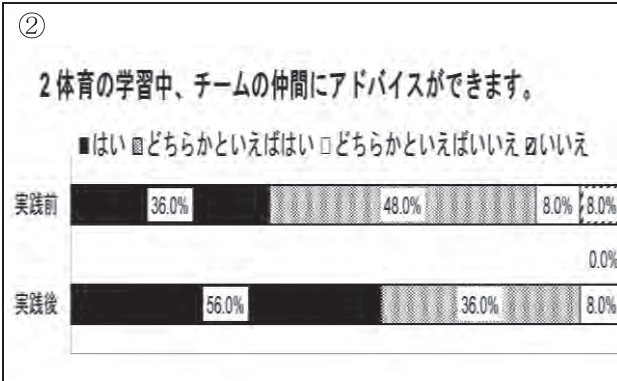


### (2) 課題

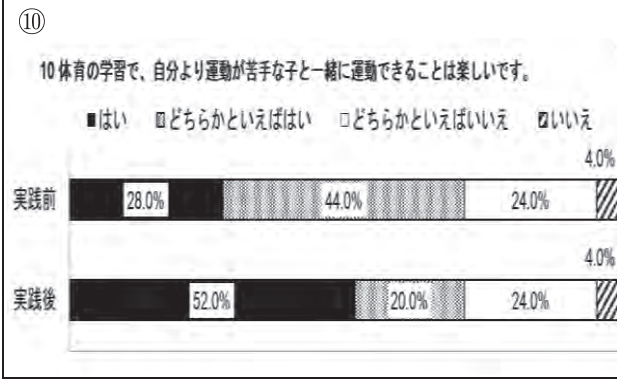
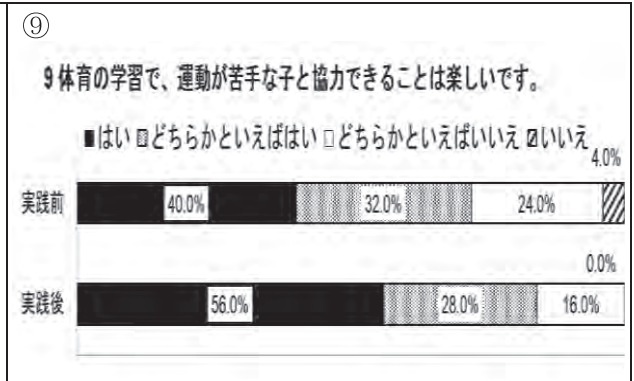
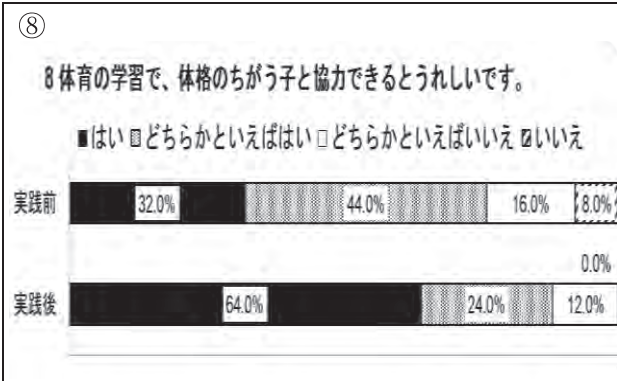
- 他学年や他領域においても子供の実態を分析し、系統的に共生の態度を涵養していく必要がある。

【児童生徒の変容】

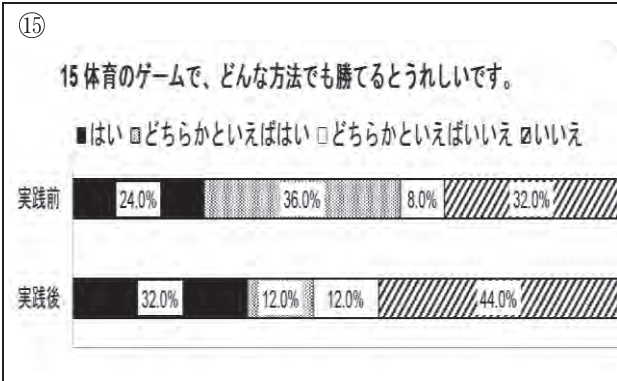
〔Ⅰ リーダーシップ〕



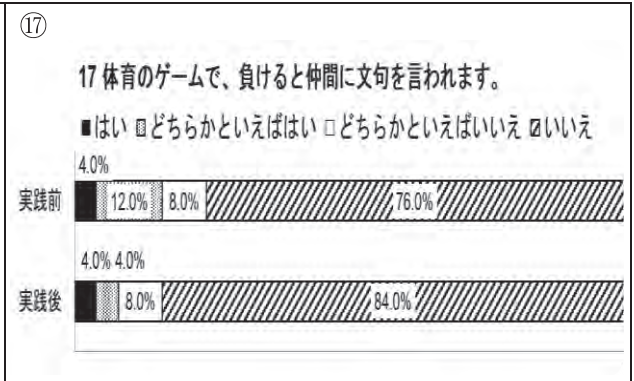
〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔Ⅴ 過度な勝利志向〕



〔排除雰囲気〕



【授業実践協力者の声】

実践を通して、子供たち同士で自発的に互いに動きを見合ったり、気付いたことを伝えたりする姿が以前よりも多く見られるようになりました。「動きを高める」だけでなく、多様な他者と運動を楽しむために、どのようなことを考えればよいのか、子供たちと考えるようになりました。

